

**虐待の被害や性被害を受けた児童の対応について**

児童（※<sup>1</sup>）が、保護者以外からの性被害や保護者からの虐待（性的虐待も含む）を受けた場合、事情聴取を受ける際の精神的負担を減らそうと、警察、児童相談所、検察庁が連携し、面接官が一括して聞き取りを行う「代表者聴取（※<sup>2</sup>）」が導入されています。

また、警察と検察庁は、この代表者聴取で得られた証言をもとに事件捜査を行っており、代表者聴取で得られた児童の証言は非常に重要な証拠になります。

しかし、代表者聴取を行う前に児童が教職員の方や保護者などいろいろな人に話をしたり、話を聞かれたりすることによって、代表者聴取の前段階で記憶が変遷したり、思い込みが入ったりして正確な情報が聞き出せなくなる場合があります。容疑者を逮捕して、その後、裁判になっても、被害に遭った児童の証言が変わったり、事実と違う部分があったりすると、代表者聴取そのものの証拠の信用性を否定されてしまうことにつながり、最終的には、児童の権利利益を守ることが難しくなる場合があります。

教職員の皆様をお願いします。児童から被害の訴えを受けた場合、次のことに気をつけて話を聞いてあげてください。

※<sup>1</sup> 児童福祉法における「児童」のうち、概ね4歳から18歳未満の児童を対象としています。

※<sup>2</sup> 司法面接や協同面接ともいいます。



←【参考】

出典  
YouTube「司法面接啓発ビデオ2018」  
司法面接支援室作成



←【参考】

出典  
YouTube「事実調査のための面接  
—司法面接を参考に—」  
文部科学省作成

**大人の方から詳しい話を聞き出そうとしない、「誰が」「何をした」だけで十分です**

「いつ」「どこで」「どのように」「何を」「何回」などの具体的な状況については、児童が自発的に話してきたときにだけ、聞いてください。例えば、「何があったの?」「どうしたの?」などと尋ねます。

児童を心配するあまり、いろいろなことを深く聞いたり、多くの大人が何度も話を聞くことで、児童は負担を感じる場合がありますし、記憶が曖昧になることもあります。また、「どうして?」「なんで?」と聞き返されたり、繰り返し同じことを尋ねられると、児童は「自分が間違っているんじゃないか」、「別の答えを求められているんじゃないか」と思い込み、当初と違う話をする場合があります。

関係機関へ報告していただく内容は、児童の言葉で構いません。また、「嘘でしょ?」と否定したり、「こういう意味だよ?」「こうだったんじゃないの?」と誘導することは控えてください。

**「誰にも言わない。」などの出来ない約束はしない**

児童から「誰にも言わないで」と言われても、「わかった、誰にも言わない」とできない約束はせず、「あなたを守るために安全を守る人たちに相談したい、力になりたいから相談したい」と伝えてください。

**「よく話してくれたね」「がんばったね」と言葉をかけ、児童の話を受け止める**

児童の話す内容が、信じられないような衝撃的な内容でも、嫌悪感等をあらわにすることなく、中立的な態度で、話を聞いてあげてください（児童は敏感です、幼くても相手の顔色や表情で嫌悪感がわかります）。

「よく話してくれたね」「がんばったね」と労いの言葉をかけてあげてください。

**確実な記録**

児童が教職員の方に話した内容などは、体裁は問いません（メモで構いません）ので、その都度、確実に記録してください。「児童が言った言葉をそのまま」記録するようお願いします。

児童が話してきたときの状況（「放課後に職員室に尋ねてきた」など）や日時を記録してもらえると助かります。

また、保護者からの虐待の場合、捜査の妨げになることがありますので、安易に保護者に連絡をとらないこともお願いします。

**連絡・お問い合わせは お近くの警察署又は少年サポートセンターまで**

